

人材交流報告書

全国科学館連携協議会

提出日 2020年1月6日

所属	富山市科学博物館	氏名	加藤 咲	印	
交流期間 年月日	2019年12月4日(水)～ 2019年12月8日(日)	交流先	盛岡市子ども科学館		
目的	展示やプラネタリウム、イベント業務を見学及び体験することにより、ノウハウを習得し、自館の今後の活動に活かしていく。情報交換をすることにより、双方の連携を深める。				

報告事項

盛岡市子ども科学館にて、5日間にわたり、展示室業務、プラネタリウム業務、イベント業務などを見学及び体験した。来館者は、未就学児から小学校低学年の子どもが多いため、科学に楽しく親しんでもらう工夫をたくさん見ることができた。特に、職員が積極的にお客様とのコミュニケーションをとっていることが印象的で、そのテクニックやキャラクターによりお客様に何倍も科学館を楽しんでもらえていることに気付かされた。以下、それぞれの業務内容とその感想等を記載する。

<展示室・展示室交流>

盛岡市子ども科学館では、展示室に職員が1人常駐している。これにより、お客様から職員にすぐに質問できる体制となっているが、それだけにとどまらず、職員からお客様に積極的に声をかけて、コミュニケーションをとっていたことが印象的であった。体験型の展示が多いため、例えば、展示物をより楽しく扱う方法を紹介したり、展示物に関連する小道具を裏から出して体験してもらったり、展示室に常設されているサイエンステーブルにお客様を自然に呼び込み、ちょっとした実験を披露したりと、その関わり方は多岐にわたっていた。職員の実験や展示の見せ方をはじめ科学の不思議にあっと驚かせるテクニックはさることながら、共に楽しもうとする気持ちを強く感じた。子どもにとって、職員と直接話して学んだこと、体験したことは強く印象に残る経験になると思った。職員のテクニックにより、展示室がこんなにもパワーアップするのだと勉強になった。

また、展示物のメンテナンスも見せてもらった。他館のメンテナンス頻度や方法など、教えてもらえる機会は滅多にないため、貴重な経験であった。



展示室交流風景



サイエンステーブル



メンテナンス風景

報 告 事 項

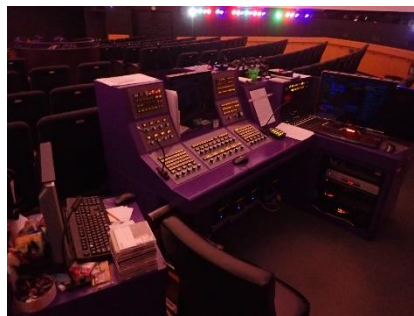
<プラネタリウム>

光学式とデジタル式両方による投影で、座席にはリスponsアナライザーがついていた。番組は、職員による生解説「星空の時間」、小さな子ども向けの「子どもの時間」、映像番組を投映する「映像の時間」があり、学習投影は予約制で平日 4 枠、土日祝 1 枠で通年行っていた。また、ナイトミュージアム(詳しくは後述)においては、「星空のみどころ案内」と映像番組の投映を行っていた。すべての投映において、投映者がお客様の前に出て挨拶をしており、プラネタリウムでも職員とお客様の“face to face”を大切にしていると感じた。また、学習投影と星空のみどころ案内では、投映者がマイクを手に持ち、座席の間を歩きまわりながら、子どもに質問を投げかけ発表してもらっていた。軽快なトークで会場は大いに盛り上がっていた。

子ども向け番組では、盛岡市子ども科学館のキャラクター“こかぼう”が主人公の完全オリジナル番組で、プラネタリウムデビューの子どもにも安心して楽しんでもらえる内容であった。“こかぼう”の番組は全 10 シリーズあり、番組中のキャラクターの表情や四季に合わせた服装のデザイン等、種類の多さに驚いた。また、“こかぼう”は子どもに人気で、よく定着していた。投映中には、子どもに声を出してもらうなど、工夫に満ちた参加型であった。座席のひじ掛けについているボタンでクイズに答えてもらうリスponsアナライザーを効果的に活用しており、子どもに飽きさせないような工夫がみられた。



盛岡市子ども科学館のキャラクター“こかぼう”



<科学たいけんコーナー>

毎週土曜日の 13:00～(適宜)、体験をメインとした実験を年間で 5 種企画し、サイエンステーブルで行っている。各回 10 分程度で展示室にいるお客様に気軽に参加してもらえる。研修で私は音の実験を担当したが、音について学び親しめる道具が多数揃っており、参加した子どもたちも次々に出てくる道具に目を輝かせていた。ただ見せて紹介するだけでなく、実際にお客様自身が道具に触れたり体を動かしたりすることで、科学の驚きを体感できると感じた。また、使用した道具も身近にあって手軽に用意できるものが多く、参考になった。



科学たいけんコーナーでの実演

報 告 事 項

<ナイトミュージアム>

毎月第一土曜の夜は 17 時半から 20 時までナイトミュージアムとして開館している。内容は、プラネタリウムでの「星空みどころ案内」と映像投映、科学工作、観望会があり、毎月テーマを変えて開催していた。12 月の科学工作はクリスマスバッジ作りで、蓄光プラ板を作った。今回に限らず、短時間で作ることができ、小さな子どもにも楽しんでもらえる工作を企画していた。スタッフの役割分担・連携が行き届いており、とてもスムーズな進行であった。



クリスマスバッジ(左)と科学工作ブース(右)

<盛岡市少年少女発明クラブ>

基礎コースと応用コースに分かれ、各 15 名ずつ年間 30 回の活動を行っている。指導や運営は全て職員によるものであった。研修中には基礎コース(主に小学 4 年生)の見学をしたが、子どもたちは慣れた手つきでドライバーや電動系のこを使いこなしており、レベルの高さを感じた。職員は、子どもに考えてもらうことを大切にしており、問題の把握や改良案の図面作成など、ほとんどを自分の力で進めていた。職員の質問の投げ方やアドバイスの仕方は子どもひとりひとりの力を引き出していると感じた。

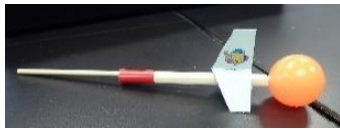


発明クラブ活動風景

<その他イベント>

○ ワークショップ

日・祝日に行っている工作イベントで、展示室にコーナーを設け、午前午後 1 時間半の間、随時受け付けていた。今回はスーパーボールロケット作りであった。自宅でも簡単にチャレンジできる内容で、参加者の反応も良かった。ボランティアさんの参加もあり、スタッフと一緒に工作の補助を行っていた。(ボランティアは高校生以上の生徒及び学生で、主な活動はワークショップの補助。)工作交流業務はワークショップ以外



スーパーボールロケット(左)とワークショップコーナー(右)

にも、夏休みや冬休みに少し難易度の高い工作を行っているとのことだった。団体に向けた工作教室は予約が入れば行っており、いつでも工作ができる準備が整っていた。題材も新しいものに随時更新しているため、何度来ても楽しめる工夫が凝らされていた。

報 告 事 項

○ サイエンスな日曜日

ゲストの先生による、サイエンスショー及び体験イベントで、日曜日の午前と午後 1 時間半ずつ開催している。今回は岩手大学の教授と学生によるイベントであった。身近にいる専門家に話を聞ける良い機会だと思った。地域性を活かした外部との連携の大切さを学んだ。

○ ロボコン県大会

盛岡市子ども科学館が共催で開催する、中学生のロボットコンテストを見学した。工夫を凝らした作品の数々を見ることができた。また、普段中学生の来館者は比較的小さいため、中学生を館に呼び込む良いきっかけになっていると思った。



サイエンスな日曜日



ロボコン県大会

<研修を終えて>

研修を通して、盛岡市子ども科学館はお客様との関わりをととても大切にしていると感じた。富山市科学博物館では、15 分程度で実験や解説を行うサイエンスライブを担当しているが、シナリオ通りに自分が伝えたいことを伝えることに精一杯であったことを痛感した。自分が分かってほしいと思っていることを全て押し付けるのではなく、お客様の年齢層やその場その場の反応に合わせ、伝える内容や伝え方を工夫しなくてはならないと感じた。そして何より、お客様に楽しんでもらうこと、自分もお客様との時間を楽しむことの大切さを身をもって感じた。お客様がぱっと笑顔になるような面白い科学の題材を提供できるように、これから励んでいこうと刺激をもらった。

今後、富山市科学博物館において、今まで以上にお客様と活発なやり取りをすることを心がけ、体験してもらうことに重点を置いたサイエンスライブをはじめ日常的な活動全般に、この経験を活かしていこうと思う。また、富山市科学博物館の職員にはセミナーでの発表を通して、お客様と科学を楽しむことの重要性和効果について伝えていく。